

まさかず  
『中井正一伝説～二十一の肖像による誘惑』

馬場俊明著（ポット出版、2009年6月453P）3500円

文学部教授 馬場俊明

2007年4月、第14代国立国会図書館長に、京都大学総長、情報通信研究機構理事長などを歴任した長尾真氏が就任した。学者文化人の館長としては初めてである。

国立国会図書館は、「真理がわれらを自由に」という確信にたって、昭和23年2月に設立された。初代館長は、憲法担当国務大臣であった金森徳次郎である。以降は、衆・参議院の事務総長経験者が交代で任命され、およそ40年にわたりつづいていた。それだけに、学者出身の長尾真氏の就任は画期的な意味をもつ。

じつは、新設の国立国会図書館の初代館長には、金森徳次郎ではなく、学者文化人であったかもしれないのである。当時、有力な館長候補として名前が挙がっていたのは、参議院議員羽仁五郎が推薦していた哲学者中井正一だった。

しかし、衆議院側の激しい抵抗とGHQの意向による政治的決着がはかられ、初代館長中井は実現しなかった。かれは副館長就任を甘受するが、悲劇はそれだけで終らない。

中井は副館長という重責をはたしながら、日本図書館協会理事長として、図書館法の成立に尽力したばかりに、病に倒れ、52歳の若さでこの世を去った。

ところで、いま、中井正一といっても、おおくの読者にとっては、「Who?」という感じであろう。

もっとも、戦前、『美・批評』『世界文化』『土曜日』などの同人誌を拠点に、反戦反ファシズムの抵抗運動をつづけ、治安維持法違反により検挙された近代知識人であったことに関心を寄せる読者は少なくない。

本書の目的は、そうした中井正一の思想と人間性を、「出生伝説」から「家訓伝説」「『土曜日』とく命まどうてもらいます>」「聴衆0の講演会」「一隅を照らす」「プロメトイスが

肝臓を喰いよった」に至る21の伝説にもとづいた物語として紡ぐことにあった。

はじめて中井正一という名前を知ったのは、学生時代に『思想の科学』の会員になったころではなかったか。山代巴の「ある農民運動の組織者」や鶴見俊輔、野間宏らの座談会「中井正一とわれわれの時代」などで、少なからず影響をうけた気がする。中央公論社から久野収編『美と集団の論理』が刊行されたのが、ちょうどそのころである。

同書には、中井正一の代表的論文「委員会の論理」や「スポーツ気分の構造」などが収録されていたが、惹かれたのは週刊誌『土曜日』の巻頭言であった。そこには、ヒューマニズムでむすびついた中井正一の思想と人間性が立ち現れていた。

とくに、時代が嘘言を弄し倦んでいるいまこそ、いずれのことばに耳を傾けるか、考えればすぐわかることだが、『中井正一伝説』では、『土曜日』の巻頭言の一部を全文収録している。

また、本書は副題が示すように、遺族や友人、知人らが思い描いたかれの肖像をうつしとり、その姿を読者の胸に刻みつけてもらうよう意図的に回想や伝聞を重ねあわせてもいる。

中井正一は、わが国初の帝王切開手術という母の貴い決意によって生まれ育てられてきた「不屈の愛」を感じながら、「社会的使命」と精神の明晰さを希求し、意志的楽観主義の態度でひとびとを包み込んだ。

その底抜けに明るく、誠実で豊かな人間的魅力に溢れた中井は、ときには、談論風発を酒の肴に、酔えば、牧水の「白玉の歯にしみとおる秋の夜の酒はしずかにのむべかりけり」と戯れる哲学者であった。

来春2月14日は、中井正一生誕110年にあたる。対話していただければ幸である。